
天国からのメッセージ

サクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からのメッセージ

【Nコード】

N4420K

【作者名】

サクラ

【あらすじ】

中学の頃、大切な人を亡くした“美彩希”は、その事を引きずりながら高校生になった。そんな時、運命の人に出会う。

大人になり、自分を成長させてくれた我が家から旅立つ時、中学の頃亡くなった恋人、“太一”から手紙が来て　！？

そんな切ない長編ラブストーリー！。

0：プロローグ（前書き）

初めての投稿です。

少々読みづらいかもしれませんが、最後までお付き合い願います！

0：プロローグ

「美彩希はまだー？」

「待ってー！葉ちゃん！」

もうこの家とはおさらばだ。

生まれてからずっとこの家にいたから寂しい気がする。

だけど、これが新しいスタートだから良いんだよね。と、母に

そして太一に呼び掛けるように心の中で呟いた。

自分の部屋の本棚に手をつけていると、高校の頃の卒業アルバムを見つ、手にとった。

高1の時の写真を見ながら微笑んでいると、美彩希の彼氏 五木葉が美彩希の隣に座った。

「うわー。懐かしいなあ…美彩希まだちっこいなあ〜」

「うーるーさーい。葉ちゃんだってこの時ちっこかったよ？」

と、笑いながらページをめくっていくと、美彩希と葉が仲良く写っている写真があった。その写真のページの中に、白い綺麗な封筒があった。裏に、『柏原 美彩希様 五木 葉様 へ』と、あまり綺麗とは言えない字で書いてあった。

こんな封筒に見覚えがない美彩希と葉は、首を傾げた。

美彩希は、その封筒を手にとり、一、二、三回裏表見返し、葉を見た。

「誰からかなあ…開けちゃって良いかなあ…」

「んー……」

葉は少し悩み、そして

「開けちゃえ」

と言った。

「……………」

なんて良い加減な……。まあ、一応『柏原 美彩希様』って書いて

あるし、良いよね？良いんだよね！？
と思いつつながら、ゆっくり封筒を開けた。
中には、白い便箋びんせんが入っていた。
便箋を開け、ゆっくり字を追った。
その内容に、美彩希はびっくりした。

「……………！？」

それは、天国からの　　太一からの手紙だった。

0：プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？

これからも引き続き、読んで頂けると光栄ですm) (m

それから、ここまで読んでのご感想や、ここ直した方が良いんじゃない！？などの部分がありましたら、遠慮なく言って下さい

1：新しい出会い

「太一！また明日ね」

「うん。気をつけて帰れよーミキ」

そう言って手を振っていつものように別れた帰り道。

“また明日”

その明日が来なくなるなんて、想像もしてなかった中2の冬。

あの事故から2年経ち、私は高校生になった。

太一…

私の名前は柏原かしわばら美彩みさき希今日きけいから高校生1年生。

私の恋人、村尾むらお太一たいちは、交通事故で死亡してしまった。私の両親は、

太一を自分の子供のように　いや、自分の子供以上に　可愛がっていた。

そんな太一を亡くして、母は私のせいだと言い、家を出て行ってしまった。それで両親も離婚してしまった。

私は父と二人暮らししているが、父は仕事が忙しく、あまり家には帰らない。どんな仕事をしているのかはわからない。だけど、毎月3日に帰って来て、1ヶ月の生活費などを置いていってくれる。

だから、私は一人暮らしをしているようなものだ。

こんな生活を2年も続けているからあまり寂しいと思つた事はない。ただ、友達が両親と仲良くしているところを見ると、寂しくなつたりはするけど、甘えたりはしなかった。

そう。本当に甘えたりはしなかった。母は自分のせいで出ていってしまい、父は私のせいで仕事に明け暮れる日々。全部私のまいた種だから、甘えるなんてできなかった。

それからずっと、恋人もいらないと思つていたし、そんなものをつくっても私のせいであつた、失つてしまふかもしれないという恐怖か

ら、そういう事から逃げていた。

「美彩希ー！早く行かないと初日から遅刻だよお！？」
私はハツとした。

いつの間にか、道の真ん中で止まっていたらしい。

中学からの親友の、久保田杏那くぼたあんなが私の制服の裾を引っ張りながら言った。

「ああ……ごめん。考え事してたあー」

適当に手を軽くひらひら振りながら歩きだした。

杏那も、全くという感じで歩きだした。

杏那は、中学の時からずっと私の事見ていてくれた親友。太一が亡くなって、母が出ていった時も、毎日私の家に来て、励ましてくれた。杏那のおかげで元気になれたし、今の私がいるのは、杏那のおかげだと思う。杏那は私にとって大切な存在。

「あーあ！素敵な人いらないかなあー！イケメンに会いたい！！」

今朝からずっと杏那はこんな感じ。中学の時、杏那は彼氏とあんまりうまくいかなくて、何回も別れていた。だから、高校では素敵な恋をしたいらしい。

私は……そんな人欲しいとは思わないけど。

「ねーね！美彩希も新しい恋見つけようよ！タイちゃんもそれを望んでると思うしいー！」

タイちゃんとは、私の亡くなった恋人、五木太一いつきたいちの事。

「だからさっ！明日の来週の合コン、一緒に行かない！？」

「はっ？！合コン！？いや……行った事ないしいわ……」

そう言うと、杏那は、私の肩をがっちり掴んで、顔を近付けてきた。

「あ・の・ね！！！！あんまりウジウジしてるといい人見つからないよ！？それにつっ！今回の合コンの相手、イケメンがいるって噂の虹ヶ丘高校のメンバーだよ！？」

そこまで言って、杏那は手を離れた。

「だから行こうよ！人生思い切りが大切よ！タイちゃんもそう思ってるよ！！！」

「やつ……いいよ！杏那の気持ちは嬉しいけど、私、まだ太一が好きだし、太一以外考えられないもん……！！」
そう言っていると、杏那は大人しく引き下がってくれた。

……と思っていたが……！！

土曜日になり、杏那から相談があると言われ、待ち合わせ場所の駅前のファミレスに行くと。
笑顔で杏那が

「合コンの相手、もうすぐ着くよ」
と、可愛くウインクして言ってきた。

ああ……杏那はこういう奴だったと思いつながら席についた。
だけど、ここで思わぬ出会いがあることに、私はまだ気付いていなかった。

1：新しい出会い（後書き）

どうでしたか？

あまり上手に書けていませんが、ぜひ、次も読んで頂けると嬉しい
です）＜「＞（

2・・・合コンでの新しい出会い(前書き)

投稿遅れました。

すみません(´>`>)

2：合コンでの新しい出会い

合コンの女子メンバーは、杏那と私と、クラスで仲良くなった女子の、小倉真希おくらまきと篠田蘭しのだらなと、中学の時の友達の、相沢小梅あいざわこめと衛藤明衣えとめいの6人。小倉真希、（通称、真希）は、とにかくハイテンション。胸まである髪の毛は茶色に染めて、長身で、目がパツチリして見ただけはめっちゃめっちゃかっこ良くて、私も最初はクールな子って思ってたけど、話してみると面白くて、話しやすい子だった。

杏那とは、あんまり仲良くない感じなんだけど。

篠田蘭（通商、蘭ちゃん）は、静かな子。綺麗な黒くて長い髪の毛で、清楚な感じの子。だけど、一緒にいて楽しい子で、杏那とも意気投合してた。

相沢小梅（通称、ウメ、小梅、アイ）は、中学の頃は問題児みたいな感じだった。短い髪の毛を金髪に染めて、よく問題を起こしていた。男子とはよく喧嘩して、後輩からかまわなかったし、気に入らない女子には喧嘩ふっかけて怪我させていた。噂では、男をとつかえひっつかえって言うていたけど、実際は、めっちゃ可愛い子で、彼は作った事がない子。ただ、よく不良っぽい男子に色々誘われてたけど。

衛藤明衣（通称えっちゃん）は、めっちゃめっちゃ天然。大人しそうに見えるけど、小梅並に問題児。小梅よりひどかったかも。学校はよくサボるし、彼は1ヶ月に1、2回はつくって、遊びまくってる。中3になってからは、一途になったけどね…。

まあそんな感じのメンバーが集結して、お互い女子の中で自己紹介をした。

男子は、まだ来ていない。

ちなみに、今の時刻は、夕方7時。約束の時間は7時30分。まだ時間はあるから、大人数用の席に着いて、雑談していた。

ちなみに、席順は窓側から、えっちゃん、小梅、蘭ちゃん、真希、

私、杏那、という感じ！

真希と杏那はお互い何故か火花を散らせていた。怖いね。

何分か経った頃、杏那が腕時計を見て、「もうすぐかな」と呟いた。えっちゃんはまだメイクをしている。気合い入ってるらしい。

「あつ、あれじゃない？」

と、真希が5人の男子グループを指差した。

「何か一人足りなくな〜？杏那ー」

と、えっちゃんがリップを塗りながら言った。

「一人遅れてくるんだってー」

「ふーん」と興味なさげにえっちゃんが返事をした。

男子グループがこっちの席に近づいてきた。

うわー。みんなカッコいいかもー。

「おっ！杏那！ちす」

と、元気に杏那に挨拶した。挨拶した男子は、カッコいいと言っよ
り、顔は可愛い感じかな。可愛すぎず、かつこよすぎずって感じ？
だけど普通じゃない感じ？それはそれで失礼か。

それから男子グループは、とりあえず席に座り、自己紹介となった。
まずは男子の窓側から。

「えつと…佐々木雄介ささきゆうすけです。十七歳です。みんなにゆうって呼ばれ
るんで、ゆうって呼んでくださいっ。んー……趣味はサッカーかな。
まあよろしく」

と、何だか面倒臭そうに言った。だけど、顔はかつこ良くて、スポ
ーツマンって感じだった。髪の毛を短く刈っていて爽やかな感じが
した。

次の人は、明るく自己紹介をした。

「えつと、1年A組の山内類やまうちるいです！」

「何で組まで言ってるのー！学校ちげーのにいー」

と、笑いながら言った。それを言われて山内くんは少し照れて、自
己紹介を続けた。

「それで…よくウルサイって言われるんだけど、仲良くしてくださいさ

い！将来の夢は芸能人かなあ〜」

と、照れながら言つて、軽くお辞儀をした。短い髪の毛に少し前髪の方がパーマがかかっているように少しクルクルなっている。

そこが少し可愛いなあと思つたかな。

次の人は、野球部なのか、髪の毛が坊主で、体もガツチリしていた。「あー…名前は井上康成やすなりです。十六歳で、多分みんなと同じ年ですね。……で、最近手相を見んのが好きです。今、部活で野球をして、頑張ってます。……多分今あー俺汗くさいかもしんないんですけど、一応タオルで拭いてるんですけど、いや中々匂いとれなくて、1回香水つけたら汗と匂い混じつて大変な……」

「ね、ちよつと喋りすぎ！」

と、さつき杏那と仲良しっぽかつた男子が突つ込んだ。

「あ、ごめん」

と、軽く笑いながら井上くんが謝つた。

「じゃあ、次俺が……えつと、名前は葛西かさいしゅん旬で、隣の井上さんと同じ年で、最近両親が亡くなつたんで、ずっと家事してますねー。趣味はゲームですね。よろしくお願いします」

男子は、みんな自己紹介が終わり、次は、女子の番になった。

えつちゃんが、ハイハイハイ！と元気よく手を上げて、自己紹介を始めた。

「衛藤明衣です！十六歳で、テニス大好きっ子です！みんなえつちゃんと呼ぶけど、明衣って呼ばれます！よろしくう」

と、始終笑顔を崩さず言つた。次は、小梅の番だ。

「えーつと、相沢小梅ですっ！めっちゃワガママでうるさいけど、仲良くしてね！得意な料理は肉じゃがですっ！よろー」

と軽く言つた。何かみんな余裕そう……何で？！てかなんて言おう

……

「えつと、篠田蘭です……。相沢さんと同じく十六歳です。趣味はお菓子作りです。よろしくお願いします」

と、小さくお辞儀をした。

私は軽くパニくっついていて、あまり聞いてなかった。

「はい！小倉真希ですっ 歳は十六です！よく、大人っぽいって言われるんだけど、中身はやばいんです！今日は1日よろしくお願ひしまーす」

真希の自己紹介が終わって、私の番が来た。

真希は、私に軽くウインクした。

深呼吸をして、今にも爆発しそうな心臓を落ち着かせた。

「かつ…… 柏原美彩希ですっ。十六歳で、好きな食べ物梅干しです……。よろしくお願ひします……」

声が少し震えちゃったけど、みんな普通にしてるから平気だよね…？

「最後は、篠田蘭です！十六歳です！今日は思いっきり楽しみたいです！よろしくっ」

と、軽くピースサインをした。可愛いなあ…。と、ぼけーっとしていたら、いつの間にか店員さんが来ていて、みんな注文していた。

「美彩希何にするー？」

と、蘭が言いながら、メニューを私に差し出した。

私は、オレンジジュースとサラダと普通のサンドウィッチセット（二個入り）を選んだ。

何分かみんなワイワイ話していたけど、何か女子の皆さんはえらく積極的で、私は会話に入らずに、ぼーっとしていたら、みんなが注文したメニューが来て、食べながらまた騒いでいた。私はオレンジジュースをちびちび飲みながら飲んでみると、携帯に電話がかかってきたから、一旦席を外してトイレに行く事にした。

このトイレは、えらく分かりづらい。

厨房の横の奥にあるんだけど、トイレのマークがないから、全然わからなく、電話も切れてしまった。

まあかけなおしたけど……。

トイレから出ていくと、ワイシャツの袖を肘までまくっている高校生くらいの男の子が、

「あの……トイレってどこですか？」

と、尋ねてきた。

「ああ、ここですよ。右が男性用トイレです」

と、言うと、ありがとくと頭を下げた行ってしまった。

私も自分の席に戻った。

2・・・合コンでの新しい出会い（後書き）

どうでしたか？

次話も見えていただけると嬉しいです。

あと、評価や感想がありましたら、お願いします。
待っています（*^|^*）

3：思い出

席に戻ると、杏那がねえねえ！と話し掛けてきた。

「もう1人の男の子来たって！楽しみだねー」

「ふーん……」

「何よ？楽しそうじゃないわね」

と、少々ふてくされながらも、杏那は男の子と話はじめた。
私はサラダをちびちび食べてると、

「あー来たー！」

と、葛西旬くんが、少し大きめな声で言った。

「あー……ごめんごめん」

と言つて、席に着いたのが、さつきトイレの場所を聞いてきた人だった。

「わー。結構イケメンじゃね？」

と、杏那が私の耳元で囁いた。さすが杏那……目ざとい。

「ほらー自己紹介しろよー」

と、旬くんが言った。

「ああ……遅れました、五木葉いつきようです。多分みんなより年上の十八歳です。よろしくお願ひします」

言い終わってから、五木葉さんがこちらに気づいた。

「あ……さっきの人だよね？さつきはありがとう」

と、頬笑みながらお礼を言った。

「い……いえ」

「え！え！なあに！？二人はお知り合いなの！？」

と。杏那が興味しんしんに聞いてきた。

「ああ、うん。さつき、トイレの場所を覚えてくれたんだ。……えつと、名前は？」

「柏原美彩希です」

「そうなんだ。いい名前ですね」

「あ…ありがとう…」
そんな事あんまり言われた事無いから照れるなあ…。
でも、何だか五木さんっていい人そう…。
そんな事を思ってるうちに、杏那が五木さんに何やら話しかけてる。
多分、杏那は五木さん狙いかな…。
私はどうしよつかない…。何か誰とも全然話してないよね。
「じゃあ次はカラオケいっちゃおう！」
と、杏那が言い、みんな盛り上がっていた。

私も、家に帰ってもする事がないから、カラオケに行く事にした。
カラオケは、すぐ近くにあり、杏那はずっと五木さんに話しかけながらカラオケ店まで行った。

「じゃー！一曲目はわたくし杏那から行きたいと思いまーす！」
「イエー！」

みんな盛り上がってますなー。てか何で私は一人寂しくはじっこでポツキーを食べてるんだか…。

「大丈夫？楽しくない？」

五木葉くんが話しかけてきてくれた。

「ああ…いえ、別に」

あんまり気を持たせたくないから、私は素っ気なく答えた。

「そう？なら良いけど…」

それで二人とも黙ってしまった。

何か…話しかけなきゃいけないっばい？かな…？

「あの…」

「なに？」

「んーと…杏那の事、どう思いますか？」

「どうって？」

あー！何聞いてんの私！

あつ、でも杏那は五木さん狙いだから、後でどう思ってたかを杏那に伝えてあげればいいつか。ナイスじゃん私！

「何か、いい子そうとか…」

「ああ、そうだなー…明るいい子かな。会話が終わらないし、楽しい子だよな」

「へー…」

よし、聞こう。

「恋愛対象としては…どうですか？」

「え？…うーん…」

何でか私が心臓バクバクしてきてる…！

「友達としてはいい子だと思うよ。でも、恋愛感情はあんまり出てこないかな…」

何故か私はホツとしていた。

「ねー！みつさきー！歌おうよー！」

と、杏那が声をかけてきた。

「ほら…！何だっけ！あの歌うたおうよ！思い出の歌！」

「え………」

思い出の歌というのは、太一とよく歌っていた歌の事だ。

太一が死んでから、一回も歌ってないし、聴いてもなかったな…。

「歌おうよー！」

「ん…いいや」

今うたったら泣きそうだし…。

太一を思い出すと、今でも胸が張り裂けそうになる。

この思い出の歌をうたったら、私どうにかなっちゃうかもんじゃないし…。

「じゃあ、私がうたおう」と

と、杏那が言つて、音楽が鳴り出した。

音楽を聴いた途端、懐かしさと悲しみがあふれてきた。

「くくく」

やめてよ…杏那…！！

やば…泣きそう…

「あれ…？大丈夫？柏原さん？」

と、五木さんが眉をひそめて聞いてきた。

「あの……ちよつとトイレ…」

と言つて、私は部屋から出た。

トイレがしなかったわけでもなく、気持ち悪くなったわけでもない。

この音楽を聴いた途端、何故か太一が帰ってきたように思えた。

ガチャ

いつの間にか、裏口まで来ていた。

裏口の階段の所で、私は涙を流していた。止まらなかった。

もうどこにもいない太一の事を、探してしまいそうになる。

ガチャ

「大丈夫？柏原さん…っ！」

五木さんが、息を切らして尋ねた。

何でここにいるのとか、そんな事思う前に体が勝手に動いた。

何故か私は、五木さんに抱きついていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4420k/>

天国からのメッセージ

2010年10月12日05時54分発行